

特別寄稿

成人看護学の取り組み

筑波大学医学医療系
山下美智代

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックは、臨地での受け入れ日数や実習時間、実習人数の縮小や臨地実習の中止など、看護師養成所の臨地実習に大きな影響を与えた。

本学は、学生に県をまたぐ移動の制限、実習中のアルバイトの禁止、継続的な健康状態の観察により、対面による学内実習が可能であった。このような状況下で行われた成人看護学領域の学内実習の取り組みの実際を紹介するとともに、学内実習を通して考えたこれからの看護学実習について述べる。

II. 成人看護学領域の実習の概要

実習は 2 週間を 1 クールとし、いずれの実習においても 2 週間の実習期間のほとんどを臨地で行っていた。

1. 臨床看護学実習 (セルフケア)

実習単位：2 単位

実習の概要：慢性期にある患者 1 名以上を受け持ち、看護過程を展開

実習方法

コロナ禍以前：2 週間の病棟実習。2 週目の金曜日のみ学内において「実習のまとめ」の発表会を実施

2. 臨床看護学実習 (クリティカルケア)

実習単位：2 単位

実習の概要：急性期 (全身麻酔で手術を受ける患者) にある患者 1 名以上を受け持ち、看護過程を展開

実習方法

コロナ禍以前：2 週間の病棟実習。2 週目の金曜日のみ学内において「実習のまとめ」の発表会を実施

3. ヘルスプロモーション実習 II

実習単位：2 単位

実習の概要：退院支援を必要とする患者 1 名を受け持ち、病棟での退院支援活動と外来医療の実際を学ぶ

実習方法

コロナ禍以前：病棟での臨地実習と外来において 1 週間ずつ受け持ち実習と見学実習を実施

III. 成人看護学領域の学内実習の実際

1. 臨地実習の変化

1) 学生への影響

臨地実習への参加に向け学生に対し、実習先である附属病院と学部の協議により①県をまたぐ移動の制限、②実習のすべての期間におけるアルバイト、サークル、部活動の禁止、③日々の健康状態の継続的な観察、記録を求めた。

2) 臨地実習への影響

実習先の附属病院より、昼食を挟まない形での半日実習を提示された。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、後に臨地実習は完全に中止となった。

3) 学内実習の実際

以下、臨地実習が完全に中止となった時の学内実習について述べる。本学では上記 1) の①～③に加え、④教室当たりの学生数の制限内であること、⑤学生同士の身体接触を避けることが遵守さ

れば、学生を校内に集めることは可能であった。そこで学生の孤独感の緩和、学習効果を考え、校内において対面による学内実習を行った。学生が感染のリスク等を訴え、通学を望まない場合は、学内と自宅で参加する学生を on-line で繋いで対応した。

2. 学内実習の実際

1) 学内実習の環境

学生の on-line 環境は、manaba (大学の教育サポートツール)、Teams (マイクロソフト)、Stream (マイクロソフト) であった。学習サポートツールとして学生は、ナーシングスキル (標準的な看護技術の習得のための on-line ツール) の視聴が可能であった。

2) 看護過程

事例(ペーパーペイシエント)と視覚教材の活用

少しでも臨場感が得られるように、臨地に近い形で学内実習が行えるよう臨地実習と同じタイムスケジュールで学内実習を進めた。

学生は臨地実習と同じ時間に学内に集合し、担当教員に「本日の行動計画(学習計画)」を提示する。その後、学生は Teams にアップされた「その日の患者情報」を確認して看護過程を展開した。患者情報は日々、更新される。臨地では、受け持ち患者のケア、看護師への報告等があり、学生が PC から情報を収集する時間は限られる。臨地では効率的に情報を収集し、アセスメント、実施につなげることが求められるため、「その日の患者情報」は数時間経過すると確認できなくなるようにした。情報収集の後、学生はアセスメントを行い、事例に求められるケアを考え、そのケアの方法、手技をシミュレーターで確認した。その後、臨地実習と同様に、学生同士、学生と教員でカンファレンスを行った。

学生が作成した事例(ペーパーペイシエント)の活用

学生数人を 1 グループとし、グループ単位で学生が事例(ペーパーペイシエント)を作成し看護過

程を展開する学習方法も行った。作成した事例(ペーパーペイシエント)をグループで交換し、日々の情報提供や看護過程の展開の指導、つまり教員の役割を学生が担うのである。実際の教員は、教員役割りのグループが作成する事例(ペーパーペイシエント)や指導内容、方法へのアドバイスのほか、教員役割りを通じて考えたことをテーマにしたディスカッションを、各グループの学習状況に応じて定期的に開催した。

3) 看護技術

事例(ペーパーペイシエント)の特徴に応じた看護技術を e-learning (Nursing Skills) で自己学習の後、時間、人数を区切ってシミュレーターを使用し、看護技術の確認、指導を行った。しかし後に、大学の取り決めによりシミュレーターの使用したグループ学習は中止となった。

IV. 学内実習に対する学生の反応

1. 学生の実習アンケートの記載から

半日臨地実習

- ・ 気持ちが整理できた。体を休めて、次の日を迎えることができた
- ・ 自分が理解できるまで調べたり、考えることができた

学内実習

- ・ 情報の重要性がわかった
- ・ 人によってアセスメントが違う (人の見方がわかった、看護観というのが、どういふものかを考えられた
- ・ on-line では発言のタイミングがつかめず、ディスカッションが難しい

2. 就職後の新人看護師(卒業生)の話から

- ・ 技術や患者さんとコミュニケーションがとれるのか不安だった。でも何とかあった
- ・ 臨地実習に行けず、自分の興味のある診療科が分からなかった
- ・ 臨地実習がなくて最初は“ラッキー”と思ったけど、いろいろな人と話せた方が (医療スタッフや患者、教員)、ロールモデルも見つ

かるし、人としての視野も広がると思う

- ・ ずっと“ソーシャルディスタンスを”と言われていたので、つい、患者さんとの距離も遠くなってしまう
- ・ 先輩や周りの人から「コロナ禍だったから…」と言われても、以前の実習や新人の様子を知らないの、「コロナ禍」での世代として改めて何かを思うことはない

V. 学内実習で代替が可能だったこと・難しかったこと

平成29年(2017年)文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」(以下、「看護コアカリ」)において、「看護系人材(看護職)として求められる基本的な資質・能力」として①プロフェッショナリズム、②看護学の知識と看護実践、③根拠に基づいた課題対応能力、④コミュニケーション能力、⑤保健・医療・福祉における協働⑥ケアの質と安全の管理、⑦社会から求められる看護の役割の拡大、⑧科学的探究、⑨生涯にわたって研鑽し続ける姿勢が示されている。以下、この資質・能力を参考に述べる。

1. 学内実習で代替可能なこと

本学の学生アンケートの記載内容や就職後の新人看護師(卒業生)の話から、③根拠に基づいた課題対応能力、④コミュニケーション能力、⑧科学的探究⑨生涯にわたって研鑽し続ける姿勢は、学内実習により代替が可能であったと考える。

2. 学内実習で代替が難しかったこと

一方で特に代替が難しかったのが①プロフェッショナリズム、⑤保健・医療・福祉における協働⑥ケアの質と安全の管理を学習することである。④コミュニケーション能力についても、学生同士でディスカッションをする機会を通して、自身の考えると伝える力、表現力、聴く力は学内実習により代替が可能と考えるが、異なる状況、境遇にある他者とのコミュニケーション能力の形成は困難であったと考える。

VI. まとめ

学内実習という新たな実習形態への挑戦から、学内実習の強みと弱み、学内実習で代替が可能なことと難しいことが明らかになった。今後は、学内実習で補う学習内容、臨地実習でのみ学ぶことが可能な学習内容の要素を抽出、整理し、各々の強みを活かす看護学実習の構築が望まれる。

【文献】

文部科学省(2017)看護学教育モデル・コア・カリキュラム, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会,
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf (2022年12月閲覧)